

はしがき

20世紀末には新しい世紀に向けた「21世紀」を掲げた様々な企画や書籍・論文が喧伝された。だが、今や21世紀もすでに20年を経過しようとしている。確かに世紀末を挟んで重要な歴史的出来事が世界的に頻発しており、それは、学問的にも、人類の生存と生活環境においても、また多くの人々の意識にも無視できない変化と影響を及ぼしている。

こうした変容は新自由主義的グローバル化の急速な展開を契機にしている。それは、冷戦の終結、第二次世界大戦以降の時代を支配した「ケインズ—フォード主義型」資本蓄積の限界と危機、情報・通信革命の急速な発展、それらの結果としての新自由主義的蓄積体制への転換とグローバル資本主義の本格的展開と深化を基本的な背景としている。

21世紀に入り人類は連続的に深刻な危機に直面している。この危機は経済的・金融的、政治的、社会的な出来事として表出してきた。9.11同時多発テロ（2001年）、リーマンショック（2008年）、イギリスのEU離脱をめぐる迷走、偏狭なナショナリズムと結びついた「ポピュリズム」的潮流の世界的な台頭、複雑で多様な紛争と貧困と結びついた止まることのない移民・難民の流れ、等々。さらに、人類の生存に関わる地球環境の累積的な悪化は一刻の猶予も許さないスピードで悪化している（2019年現在、ブラジルの極右大統領ボルソナードはアマゾンの広大な熱帯雨林の伐採と破壊に積極的である）。他方、貧困や格差の拡大や雇用不安といった社会的不安の拡大は、「ホモ・エコノミクス」の覇権のもとに多くの人々の消費主義的メンタリティを強め、精神と思考の委縮と画一化に導いている。その結果は国家主義の強まりとそれへの依存、民主主義制度の空洞化である。

以上のように、現在の時代状況はポスト国民国家とグローバル化が不可避的な傾向であるが、それゆえに、ナショナルな発想と思考がこれと対峙し、あるいは共振・協調している状況にある。本書が対象とするラテンアメリカはまさにこうした時代状況を先取りしている。この地域の現代史はまさに新自由主義

の「実験室」であたった。同時に、この地域の民衆は軍事的・抑圧的・独裁的体制をくぐり抜けて、ポスト「新自由主義」と「もう一つのグローバル化」、
「下からのグローバル化」を困難ななかで試行錯誤しながら模索してきた。

本書は「ラテンアメリカ研究入門」というタイトルを掲げているが、この地域の政治的・経済的・歴史的な諸現象を包括的かつ総合的に扱ってはいない（筆者はラテンアメリカに関する単著としては、『現代ラテンアメリカの社会と政治』日本経済評論社、1993年；『現代メキシコの国家と政治——グローバル化と市民社会の交差から——』御茶の水書房、2010年を出版した）。その意味では、本書は限定的・選択的である。ラテンアメリカの現在を考え、その将来を構想する点で基本的な論点と課題に集約させている。それゆえ、本書は「新自由主義的グローバル化」の時期を対象とし、それが民衆の生活に与えた諸困難を再確認し、民衆が主体的にそうした困難にどのように立ち向かっているか、そのためのナショナル、リージョナルに市場の論理を超えるどのような構想を抱いているか、さらには米国のヘゲモニーに対して「抵抗するグローバル・サウス」をいかに構築しようとしているのか、こうした論点を検討・考察した。

本書は大学での「ラテンアメリカ研究」という授業向けに、法律文化社の有能な編集者、小西英央氏のご尽力をいただいて極めて短期間で書き上げた。小西氏の理解と協力なしでは本書は日の目を見なかったかもしれない。ここに、改めてお礼を申し上げる。

2019年9月21日

松下 洸